

# 自然と法

(中)

——プラトン「国家篇」における——

村井 観 亮

## 三 第二国家における自然と法<sup>ピシス ノモス</sup>

### (一) 「豚の国」の浄化と第二国家の成立<sup>カタルシス</sup>

人間の欲望には限りが無い。第一国家における健康にして且つ真実な人々は、初めは単に「生存のために」必要な程度の簡単な生活に満足していたものゝ、いつの間にかやがてその欲望は増長し、最早単に着ること、食べること、住むことのみには満足せずして、華美な衣服、美味な食物、豪華な住居を求めるようになる。諸の調度品が必要の度を越えて贅沢になることは言うまでもない。そのみではない。人々は絵画、音楽、演劇などの娯楽をさえも求めるようになる。人の欲望はかくの如く限り無く増大し、その生活は量質共に複雑多岐、多色多彩のものとなるのであるが、その結果は病氣である。又このような人々から成る国家は、徒らに膨脹する人口を養い、限り無く増大する彼らの欲望を充たす必要から勢い他国をも侵略し、これと戦争せざるを得なくな

る。地上に初めて出現した第一国家が、自然のおもむくまゝに放任せられた既に生れた「豚の国」とは、正にこのような国であつた。それは、簡素にして健康真実であつた初に比べて余りにも贅沢であるのみならず、やがて病氣と戦争という二大災厄を人類にもたらす「熱に浮かされた」病的の国でもある。が、人類や国家にかゝる災厄をもたらす唯一の原因が、人の限り無き欲望であるとするれば、我々の当面の問題は、限り無き欲望の浄化でなければならぬ。「豚の国」が浄められる所以であるが、かく浄められた国こそ、「本性に従つて建設せられた国」(kata physin oikia theisa polis) (428e)であり、最初に建てられた第一国家と、最後に仕上げられる智慧を愛する哲人の国家に対して第二国家と称せられる。

第二国家はかくして成立するわけであるが、然しこれを生む浄化は、守護者の教育と訓練と、而して又彼らの生活を規定する立法と、この三つを通じて行われる(389e)。従つて、彼らが受ける

教育、訓練、立法の三つを知ること、単に教育学上の問題たるのみならず、第二国家並にその構成員たる国民、特に守護者の魂の性格を知り、そこにおける自然と法の問題を解決せんとする私に取つても重要である。

## (二) 守護者の教育、訓練。立法——性格の陶冶

守護者の教育論に入る前に、一応守護者の意味を明かにしておかねばならない。国家篇<sup>ポリティア</sup>に出てくる守護者 (phylakôn) には二つのものがある。第一のものは直接に内外の敵と戦つて国を守る軍人 (stratiôtai) であり、第二のものは敵と戦うことによつてではなく、智慧 (sophia) をはたらかすことによつて国を守護する支配者 (archôn) である (428b—430 c)。軍人は戦争によつて国を守りをするが、国の最高責任者ではない。一国の最高責任者であり、且つ最高支配者である者は、後の archôn であつて、軍人はこの意を体し、その命令によつて内外の敵から国を守るに過ぎない。その意味において軍人は支配者の補助者 (epikouros) である。国家篇全体において取り扱われる守護者には、この両様のものが含まれている。そして今こゝで我々が見ようとしている守護者も亦、大体この二つであるが、たゞこゝで注意したいことは、守護者らしい守護者である支配者の教育はこゝだけの教育や訓練のみでは不十分であつて、後に来る愛智者 (哲人) の教育にまたねばならないということである。

扱て然らば守護者の教育や訓練は、そして又彼らの生活を規定する諸の法律は抑々如何なるものであるか。これに関するプラト

ンの敘述はまことに詳細を極めているが、その特質を知るために、我々は先づ守護者に課せられている任務を明らかにしなければならぬ。教育や訓練の内容並びに方法を決定するものは、被教育者の教育が完成せる暁において彼らに課せられるであろうところの任務であるからである。では、守護者に課せられる任務は何であるか。

言うまでも無く、それは外敵を防ぎ内訌を静め、「法律と国を守り」、「厳密なる意味で一国の自由を作り出し」、「一階級が特別に幸福になることではなくて、国全体が幸福になること」(400b) を図ることであつて、それは最早生産人の如く單なる欲望に従つて生活必需品を生産すれば足る程度の輕微な仕事ではなくて、實に一国の吉凶禍福にもかゝる重大任務である。従つてかゝる任務を遂行すべき守護者の教育は殊の外に重視せられ、先づ守護者たるべき者の素質の選定から、教材の取捨選択、環境の整備に至るまで、事毎に細心の注意が払われ、かゝる重大任務を遂行するに足る立派な守護者の育成に万全の措置が講ぜられる。が然らばそのような教育は一体どのようなものであるか。私はこれを次の三点に要約したい。

先づ第一に言われることは、そのような教育は倫理的徳性の涵養を旨とするものでなければならぬということである。

周知の通り、徳<sup>アレテ</sup>とはもと各事物の有する固有の性能<sup>はたらき</sup>を意味する。例えば剪定鋏には葡萄などの枝を剪定する独自の性能があり、眼には見る、耳には聞く性能がある。それが剪定鋏や眼、耳の性能<sup>アレテ</sup>であり徳である。同じように、魂には魂独自の性能即ち

徳がある。「生きたり」、「監督したり、統治したり、熟慮したり」することは、魂以外のものゝ能くするところではないからである(353d. e)。が然らば、守護者の持つべき徳とは果して何であるか。それは何よりも先ず敵と格闘してこれに打ち勝つだけの頑強な身体、鋭敏な感覚、敏活な動作、更に如何なる敵をも恐れぬ大胆不敵さなどでなければならぬが、然しこれらだけでは未だ守護者の徳は完全ではない。内外の敵を破ることばかりではなくして、国家を善く統治し、国家に取つて最強の敵であり、最悪の原因でもあるところの、国民相互の間の不和(内訌)を無くし、全国民を幸福にするという、このような重任を完遂せんがためには、腕力の如き謂わば形而下的能力のみでは最早不十分であるからである。かくて守護者は、国を善く統治するに足る徳性<sup>アレテ</sup>を必要とするが、そのような徳性は、最早欲望に支配せられてその奴隷たるに甘んずるようなものではなくて、欲望を越えてこれを支配し、「欲望のどれが美しいか醜いか、又どれが善いか悪いか、正しいか正しくないか」(493b. c)を本當に知り得るようなものでなければならぬ。自己の欲望に打ち克つてこれを支配し、その善悪美醜正不正を客観的に判定し得る者のみが、欲望を生命とする大衆をも支配し、その行くべき道を正當に指示し、彼らを真に幸福になし得るからである。さればこそ、守護者に求められている徳性は、戦争に直接役立つ性能のみならず、一見したところ守護者には不必要である、否な有害であるとさえ思われる徳性<sup>アレテ</sup>、例えば、自己の欲望に打ち克つ勇氣(克己)と節約、同族に対して思いやりのある優しい心、真理を追求する愛智愛学の精神、或は

又神々に対する敬虔の徳、両親に対する親愛の徳など、要するに軍人よりはむしろ愛智者(哲人)に相応しい倫理的徳性である。守護者の教育は、かくて何よりも先ず倫理的徳性の涵養でなければならない。

倫理的徳性の涵養を旨とするこのような教育は、第二に禁欲的、又は反欲望的である。守護者がその教育途上において、如何に多くの欲望と闘い、又如何に多くの贅沢を追放しなければならなかつたかは、その教育、訓練、立法を見れば明らかである。

先ずその謂わゆる音楽教育についてこれを見るに、彼らはもの心のつき始める幼年期から守護者教育を受けるのであるが、そこで最初に与えられるものは、いづこも同じ囁語や童話、童謡の類である。けれどもそれらは、今日見られるような、児童本位の愉しいものではなくて、たゞ大人が大人の立場から見て教育上有益にして且つ合法的であると判定したものののみであり、従つてそれらが如何に無味乾燥にして且つ單調なものであるかは想像に難くない。体育とても同様である。体育といへば普通には遊戲、競技、狩獵などを意味するが、このようなものは、体育としては枝葉末節である(412b)のみならず、兎角違法的なもの(para-nomon)になり勝ちである。守護者たらんとする者の体育はこのような違法的なものではなくて、体育本来の目的であるところの、魂の徳性涵養に役立つものでなければならぬのである(410c)が、結局それは鍛鍊を主とするスパルタ式の体育とならざるを得ない。

欲望や快樂に対して否定的である此のような教育においては、

従つて訓育が重視せられる。彼らは諸の欲望、快樂、苦痛、恐怖などの中に置かれて用意周到に訓練せられ(413c-e)、守護者に不相応と思われる贅沢や有害なるものは、一切彼らから遠ざけられ追放せられるのであるが、このようなことは、彼らの生活法を規定する法律の制定によつて愈々決定的となる。

そも／＼一国の安全を直接におびやかすものは、言うまでもなく外敵であるが、然しそれにも劣らざる危険を国にもたらすものは、内敵、即ち国内における不和葛藤である。国民相互の団結が要請せられ、相互間の「親愛」又は「和」が尊重せられる所以であるが、かゝる団結を破り、和を乱す最大悪の最大原因は、土地、家屋、その他の財産の「私有」に基づく内紛である。若し全國民が、否な全守護者が心を一つにし、同一のものを「私のもの」と言い、共に同じようにこれを使用し、互に同喜同憂するならば、同一のものを爭奪し合うこともなく、従つて亦互に憎み合うこともなくなるからである。そこで、元來欲望に身を任せてこれと運命を共にする生産人は別としても、少くとも自己一身を犠牲に供して／＼も一国を守るべき守護者には、それが如何に苦痛であろうとも、万止むを得ない場合を除いては、自己の身体以外の一切の私有が禁じられ、すべては彼らの共有とならねばならない。かくて土地、家屋、その他の一切の財産は勿論、婦人や子供に至るまでもの共有が法律によつて制度化せられるのである。教育や訓練によつて一切の贅沢や有害な欲望を追放せしめられた守護者は、かく一切の私有を禁じられることによつて愈々徹底的に私利私欲から遠ざけられ、恰も傭兵の如く地上的幸福の一切を奪われ

てしまつたのである(419 a, 420 a)。先きに私は、限り無き欲望と「豚の国」の淨化について語り、それは教育、訓練、立法の三つによつて行われると言つたのであるが、その内容や方法は凡そこのようなものであつた。そしてその仕事も今やこゝに完了し、守護者個人の魂も国家も「本性に従つて」<sup>ビシネス</sup>當にあるべきように整えられたのである。

守護者の教育は、かくて先づ第一に倫理的徳性の涵養を旨とするものであり、第二に禁欲的又は反欲望的であると言ふことができるのであるが、もう一つ最後に附け加うべきことは、それが結局性格(*ēthos*)の陶冶に終るとのことである。

成程守護者の魂は、嚴格なる教育と訓練によつて、そして又私情をいさ／＼かも許さぬ立法によつて、私利私欲の念を徹底的に淨められ、地上一切の幸福を失つたのであるが、その代り、智慧、勇敢、節制、正義、その他の徳性を与えられ、かゝる魂によつて建設せられる国家も亦自ら同様の諸徳によつて秩序づけられ、諸階級間の醜い内紛も消え失せ、まことに美しき調和あるものとなつたのである。而もこのような秩序や調和をもたらすものは、他ならぬ智慧(*sophia*)である。というのは、魂や国がこのような秩序を獲得し、よく調和を保ち得るに至る所以のものは、欲望が淨められた結果、個人の魂においては三つの魂が、又国においては三つの階級が、夫れ／＼「他事」や「多事」には手を出さず、たゞ彼の「一人一事」の原則に基いて自己本来の職務にいそしむからである(433 a, 441 d, e)が、魂や国をこのように指導し監督するものこそ、実に魂の支配者智慧に他ならぬのであ

る。「本性<sup>ピシス</sup>に従つて」育成せられ、美しき諸徳を与えられた守護者の魂や国は、このように智慧が支配するところのものであるが、然し、今ひるがえつて此れを考えるに、守護者の今の智慧には、まだ「神的な實在」の認識無く、従つて亦そこには、何故に然るかの論理的自覚も存在しない。

とはいえ、彼らの智慧や見識には如何なる根拠も存在しないというのでは勿論ない。彼らは未だいたいけな幼児期において既に早くも神話を聴かされるのであるが、そうした神話にしても、決して「そこら辺りの勝手な人々によつて作られた勝手な物語」ではなくして、「事実においても言葉においても、單純にして且つ眞実であり、自己は變化せず、他人をも欺かない」(382 e)ことを型として作られた神話である。こういう僅かな一事を見ても判るように、守護者の教育に用いられる教材は、まだその必要もなさそうな幼児の教育においてすらも既に、周意周到に且つ細心の注意を以つて、「同じ型に従つて同じように在るところのもの」(tò aei katà taútā hōsaútōs échonton) 即ち眞実に存在する實在(ontos on)に關係づけられており、かゝる關係無きものは如何なるものも最早教材としての価値を失うのである。従つてこのような教材によつて終始一貫教育せられ訓練せられる彼らの智慧や見識が、無根拠どころか、常に實在の上に立ち、實在と何らかの關係を保っていることは言うまでもない。我々といえども此の事實に故ら眼を蔽うものではないが、たゞこゝで言い得ることは、彼らの智慧や見識は、未だ眞理や實在を學問的に突き止めた自覺的なものでないということである。尤も、彼らといえども既

に(広義の)音楽を學んでいる。然しこのようなものは未だ學問ではない。元來學問は、單に物語を聴いたり話したり、或る考えや徳を外部から植え付けられたりするようなことではなくて、本當に物事を考えることを教えるものでなければならぬ(522 e, 523 a)。というのは、思考能力としての智慧は、神的なものとして既に最初から凡べての人々に与えられている(158 c—e)。が、教育も受けずにそのまゝこれを放任する時には、それは眠り込むか、あらぬ方向に逸脱する。こゝにおいて、これを喚び醒ましたり、常道に引き戻したりして、これが正しく眞理や實在を考えるように仕向けることが必要となるのであるが、かゝる仕事をするものこそ眞の學問であり、又眞の教育でもある。ところが我々の守護者は、ソクラテス自身の言葉によるも、まだこのような學問は一度も受けていず、たゞ「習慣によつて」教育され、「知識ならぬよき調和」や、「よき韻律」を与えられているに過ぎない(523 a)。彼らの智慧や見識が眞理や實在の學問的研究を経たものでなく、従つてそこには眞理や實在の認識もなければ、論理的自覺もないと言う所以であるが、然しこのような智慧や見識は、最早純粹なる意味の智慧や見識ではなくして、單なる自然の性質(physis)であり、性格(ētos)にしか過ぎない。唯だ習慣による有用な教育と訓練とのみによつて外部から植え付けられた徳性は、それが如何に教育や訓練の結果であらうとも、認識の光によつて照らし出されていらない限り未だ單なる自然的性情を脱し切らず結局性格に過ぎないからである。從來の慣例による教育(376 e)と訓練とのみによつて人の魂を育成せんとする守護者の徳性が、

折角真理と実在とによつて裏付けられながらも、終に性格の陶冶に終らざるを得ない理由も亦こゝにある。

### (三) 第二国家における自然<sup>ビシス</sup>

第一国家は、既に我々の見たように、人間の生存欲から自然に発生したのみならず、発生後においても欲望の増長するにまかせて発展膨脹し、その生れから生い立ちに立るまで、殆どすべてが自然的であつた。然るに今第二国家に至つては、事情は全く違ふ。というのは、第二国家は、第一国家とは異つて、人間の意図によつて作られた人為国家である。即ちそれは、第一国家が自然に放任せられた結果もたらされた不健全さと不真実さとを除こうという意図の下に、数々の浄化が加えられて出来た国である。此の意味において、第二国家は自然的<sup>ビシス</sup>存在であるというよりは、むしろ多分に法的<sup>ノモス</sup>、人為的存在である。が、然らばそれは如何なる意味においても自然的要素を含んでいないであらうか。否な、そうではない。それは次ぎの数々の事由によつて自然的<sup>ビシス</sup>である。

先づ第一に我々の指摘しなければならないことは、第二国家の誕生動機がたとえ如何なる意図の下にあらうとも、その動機そのもののうちもう一つ深い根柢には、矢張り生きんとする根強い生存欲が働いている、そしてその限り、第二国家といえども第一国家の延長に過ぎないということである。成程人の欲望は、第二国家に至るに及んで数々の浄化が加えられ、殆ど清掃せられ否定し尽くされたかの如き観がある。然し、それは既に最初に触れたように、限り無く増長し、いつの間にか自己の限界を越え、度を過す欲

望について言われることであつて、決して欲望そのものが否定し去られたのではない。生存の事実を卒直に肯定してこれを素直に受け取る人生肯定の積極的態度は、第二国家においても依然として変らない。試みに、第二国家誕生の動機を作つた守護者出現のいきさつを述べるソクラテスの敘述を見るがよい。如何にも坦々たる口調で彼はこう語つてゐるではないか。「若し我々が十分な土地を持つて農耕しようとするならば、隣国を侵略しなければならぬ、又隣国の人々も、必要の度を越えて財産の限り無き獲得に身をゆだねるならば、我々の国を侵略しなければならぬのではないか」。その次ぎに来るものは戦争であらうが、そうなれば、「出征して全財産」その他を守つて侵略者と戦う少からざる軍隊を置き、これを養わなければならない(373b, c)。ソクラテスはこのように語つてゐるのであるが、その敘述のどこを見ても、欲望を否定した跡はなく、限り無き物欲を達成せんがための隣国との戦争をさえ否定してはいないのである。

第二国家の発端において、彼はこのように欲望なる自然を肯定し、そのための戦争をさえ黙認してゐるかと思はしめる程であるが、然し、軍人(守護者)の教育論に入るに及んで、彼は俄に従来の態度を一変し、著しく禁欲的又は反欲望的となつたことは、既に我々の知つてゐるところである。一方においては欲望を肯定しながら、他方においてこれを否定してゐる。如何にも矛盾しているかの如くであるが、事實は必ずしもそうではない。というのは、守護者に要求せられてゐる禁欲は、外敵と戦うのみならず、やがては内敵をも防ぎ、全国民の幸福を図らねばならない極

めて重大な任務を彼らに達成せしめんがために、彼らに要請せられる貴き犠牲であり、従つてそれも結局は「全財産その他を守り」、「全國民を幸福」にせんがためのものに外ならないからである。

第二国家は欲望の徹底的浄化によつて生れた国でありながら、尙お依然として欲望を肯定していること正にかくの如しであるが、然しそれは、浄化の意義からしても亦当然である。浄化は限り無き欲望の浄化であつて、欲望そのものゝ否定ではなかつたからである。事実、有害無益なりと評価せられた欲望はあえなく否定し去られたものゝ、止むを得ざる、又有益なる欲望は、厳しき浄化にも能く堪へ得たのである。<sup>(註一)</sup>が、その具体的な現われの一つは、何よりも生産者階級の健在である。成程彼らは被支配者である。支配者や軍人によつて統治せられ監視せられながら生産に従事しなければならぬ謂わば被圧迫階級であるが、然し彼らは、例えば奴隸のような非國民でもなければ、専制治下に見られるような暴力によつて圧えられている階級でもなく、たゞ自己の天性、即ち素質に従つて与えられた生産業務に従事するのみであり、その点守護者達と共に国家に取つて不可欠の構成要素である。

生産者の業務は、その天性、<sup>ピシス</sup>即ち素質<sup>ピシス</sup>に依じて与えられると言つたが、素質に依じて職業を決定する此の方法は、第一国家の建設において既に打ち建てられた国家創業の原則であつて、これがそのまゝ第二国家に継承せられることは当然である。のみならず、第二国家においては、素質によつてその所屬する階級までも

決定せられ、素質の有する比重は第一国家におけるよりも遙に重くなる。が然らば、このように我々の職業と、その属すべき階級とを決定する素質（それは大別して三つであるが）は、一体どうしてできたか。勿論我々は、このような問題に対する理論的究明を今プラトンに期待することはできないのであるが、神話（414d-415a）に托して語られている彼の言葉によれば、それは我々が地上に生まれて来る以前、既に地下において形造られたものである。大地の神が我々を創造したからである。が我々を創造するに際して、神は或る者には金を、他の或る者には銀を、又他の或る者には鉄及び銅を混入した。我々に支配者、軍人、生産者の三階級が生じた所以であるが、素質が若しこのように我々の出生前に確定せられたものであるとすれば、それは最早人力を越えた宿命的なものであり、従つてそれに依じて決定せられる職業並びに階級も、人々の恣意によつてみだりに変更すべからざるものである。尤も子孫は、大体において、最初の祖先が神から創られた素質と同じような性質を持つて生まれるが、時としては、金族から銀族が、銀族から鉄銅族が、又逆に、鉄銅族から銀族が、銀族から金族が生まれる。職業の変更や階級の移動がこれに依じて行われることは言うまでもない。プラトンの物語るところは凡そこのようなものである。勿論これは神話であつて、プラトンがこのまゝを信じていたとは考えられないのであるが、素質が職業や階級を決定する基本的要素であると彼が考えていたことには間違いない。

素質の重要性は、更に教育面からも強調されねばならない。性

格の形成において素質の持つ役割は、教育や訓練のそれに劣らず重要であり、不可欠であるからである。尤も、生産事業、例えば農業のような比較的容易な仕事に従事する生産人の教育においては、これは余り問題ともならないであろう。そのような仕事には素質を必要とする程の特別な技能や徳性が要らないからである。又たとえそれが要るとしても、そのようなものは教育や訓練によつて後から容易に授けることができる。軍人の教育にしたところが、或る程度同じことが言われる。彼らは内外の敵と戦つて一国の安全を保つべき重大使命を有し、そのために、例えば勇敢、克己、節制などの諸徳を身につけねばならない。彼らが多年の教育や訓練を受けねばならぬのみならず、それに適応する素質が求められる理由もこゝにあつたのであるが、然しこれらの諸徳も結局は、「身体の諸徳に近く」、「本当に前には内在しなかつたのに、後から習慣と訓練とで植えつけられ得る」(518c)ものであつて、必ずしも先天的素質を必要としないのである。

然るに、その考え方、行い方の如何が直ちに国政に反映し、国民全体の吉凶禍福にひびき、やがては一国の危急存亡をも左右する支配者の教育に至れば事情は全く変り、素質の良否が大きく問題とならざるを得ない。けだし、支配者の任務は他の何ものにも比べることのできない重大任務であり、これを完遂するためには、親愛、節制、勇敢、正義など、苟も一国の統治に必要とされる限りの徳性がなければならぬのであるが、尤中缺くべからざるものは智慧である。智慧は一切諸徳の冠<sup>2</sup>べんであり、中軸であつて、これ無き時は他の諸徳も統一を失ひ、断片的諸徳と化する

のみならず、最早真の徳でもなくなるからである。而もこゝで我々に取つて重要な事は、かゝる智慧が他の諸徳とは異つて、最早「後から」は絶対的に植えつけられないということである(518e)。<sup>(註2)</sup>守護者(軍人、支配者)たるべき者の素質において、「愛智的」(philosophos)、「愛学的」(philomathes)性質が特に慎重に取り扱われる所以であるが、素質を以つて性格の形成に不可欠のものであり、従つて又教育上重要々素であると私が言つた理由も亦こゝにあるのである。

愛智愛学の性質をその内容とする此のような素質<sup>ピシス</sup>は、然しながら、最早単なる自然の性質ではなくして、むしろ本質<sup>ピシス</sup>である。普通に謂わゆる素質は、地上的な肉体と先天的に結びついていると思われる性質、例えば強欲、大胆、怒りっぽい、臆病などを意味するのであるが、プラトンによれば、既に先きにも触れたように、地上的な肉体と結ぶこれらの自然的性質は、真に先天的性質ではなくて、たゞ地上において後から形成せられた後天的人為的性質であるに過ぎない。「本当に前に内在せず」、たゞ習慣などの力によつてのみ作られたからである。所が智慧は、このような地上的人為的なものではなくて、「何よりも一層神的なもの」(518e)であつて、常に生成の彼岸に在る。生成の彼岸における超越的存在ではあるが、然し同時に又生成する人間の魂の内にも入り込む、これが智慧である。他の諸徳が同じ魂の徳でありながら、終には先天的ではなくて後天的人為的たらざるを得ない中において、たゞ智慧のみがこれら諸徳の中軸となつてこれを統一し、これに確固たる根柢を与え得る所以のものは、魂に内在する智慧が、同時



に生成を超越する神的存在でありながら、同時に魂の内に入り、魂の諸徳を統一し根拠づけ、やがてその人をして人たらしめるものであるが、然しこのような智慧は、最早人の単なる素質でもなければ又単なる自然でもなく、実に人の本質又は本性である。その者をして者たらしめるもの、又は、それ無くしては者も者たり得ないところのそれ、これこそ正にその者の本質であり、本性であるからである。

支配者の素質を媒介として得られた本質又は本性は、かくてその者本来の性質を意味するが、それは同時に又その者の当に在るべき性質をも意味する。その者本来の性質は、それを内在せしめながらも未だ完全にそれを実現していない地上の現実的存在に取つては、やがて当に実現さるべき目的々理想的存在となるからである。若しこれを人間について言うならば、人間がその本質として内に有する智慧に支配せられ、諸徳を統一し魂の調和(harmonía)と秩序(táxis, kósmos)を保つて正しき人であることは、「本性に従う」(katà phýsin)ことであるが(444 d)、それは又一切の教養、訓練の目的であり、理想でもある。国家についても同様である。限り無き欲望に支配せられた「豚の国」が浄化せられ、智慧ある支配者がこれを統治し、国民全体が一致協同することは、国家「本来の相に適つた調和」(katà phýsin symphónian) (432a)であるが、このような国を建設することは、「豚の国」から見れば、「在るべきように」(katà phýsin) (428 e) 国を作ることであり、理想国家を建設することである。このように、者の本質又は本性は、同時にその者の当に在るべき目的々又は理

想的性質を意味し、共に phýsis の名の下に包摂せられることを忘るべきではない。

第二国家に現われている自然として最後に挙げ度いことは、民族意識の高揚である。プラトンによれば、人々が戦争をする以上、敵を飽くまでやつつけなければならぬ。その土地の割取、財産の掠奪、家屋の焼却、捕虜の奴隷化などは此の際当然許さるべきことであるが、然しこゝにいう敵とはギリシヤ人以外の民族のことであつて、ギリシヤ人相互のことではない。元来戦争と名のつくものは異民族間にこそあれ、同族間にはない。同族間の紛争は戦争ではなくて内訌、即ち内輪もめに過ぎない。従つてかゝる内輪もめにおいて、上述のような残忍行為をすることは、骨肉相食み、養育者たる母親を切りさいなむに等しい。殊に同族から獲得した武器を、戦利品として神殿に奉納するが如きことは、ギリシヤ人に対する誼しみを害うのみならず、骨肉から獲得したものを奉納することであつて、神聖を瀆すことでもある(469 b—471 b)。

かくて同族間の争いはできるだけ避けるべきであるが、それでも尙お争わねばならぬ時は、相手を懲罰するのではなくて、仲違いを起こさせる少数の張本人と戦つてこれを正気に返えらせ、彼らによつて苦しめられている罪無き大衆に謝罪させるのである(471 a, b)。

プラトンはこのように民族意識を高揚し、同族間の平和を極力保とうとするのであるが、それでは彼は血のつながり、そのものを重視したかと言へば、必ずしもそうとばかりは言えない。という

のは、例えば婦人や子供の共有論に現われているように、彼は親子、兄弟、姉妹などの間に流露する自然の情愛に対しては必ずしも同情的ではなく、むしろ冷淡でさえあるからである。して見れば、今プラトンの民族意識の高揚を以つて直ちに血縁に対する自然的感情の尊重であることは早計であるかとも思われるが、然しよしその動機が何であらうとも、彼が自己所屬の民族を第一に考え、その協同と親睦とを唱えたところには、矢張り一種の母胎に対する自然的感情の流露が見られるのである。

註

① 欲望については後になつて詳しく説かれるが(558e, 571a)、それによれば、欲望には必要な欲望と不必要な欲望とがある。前者は不可避なもの、及び身心に有益なものであるが、後者は避けようと思えば修練によつて避け得るもの、及び身心に有害無益なものである。ここに興味あることは、プラトンが愛智を以つて智慧に対する欲望であると言ひ、又節度があると思われている人々にも、粗野な違法的欲望があると言つていることで、カントが実践理性の無上命法において欲望や感情を全然否定していることと対比すれば愈々興味が深い。

② 魂の本質は、生存に対する欲望や意志ではなく、智慧にあるというプラトンの主知主義的な考え方は、ここに最もよく現われている。且つ靈魂の不死は、魂がこのような先天性を有し、神的存在であるが故に可能でなければならない。なお靈魂の不死については後に触れるであらう。